

夜の天使^(注1)

イルゼ アイヒンガー 著
島浦 一博 訳

こういうのが十二月の明るい日なのだ、己の明るさをよくはつきり理解しているがゆえにますます明るくなって、己の青白さを恨みに思いながらも己の短さを約束と受け入れ、長い夜に育まれてしなやかに己に耐えられるほど十分に強くなった、十分に強く、十分に弱く、そして温和な。十二月の明るい日は黒の中から輝きだす、ただその中からそんな日は多くはない。もし多くあったら、妙な出来事が多く起きすぎることになるし、いとも簡単に神の御目に変わる教会の塔の時計が多くなりすぎてしまうから。だからこんな日はめつたにないのだ——妙な出来事は妙なままであるように、戦争から帰還した人々が砲弾で失ったはずの手脚に痛みを感じることがひんばんになりすぎないように、ずいぶん前に凍傷で失った両手で多くつかみすぎることがないように。おかげで、十二月の明るい日が乳をくれる夜のことを知りすぎることではない。それでも時に、そのような日が幾日かあるのだ——南へ渡ることを忘れてしまった鳥たちが。十二月の明るい日が、鳥が、町の上空にその明るい翼を白々と広げると、大気は暖かさに震え、私たちの息を凍てつく前にもう一度見えなくする。そして時が来たら、たちまち死んでしまう。暮れなずむ空や赤く染まる雲

など望まず、あからさまに血を流して死ぬのでもなく。屋根から落ち、そして真っ暗になる。もしこんな彷徨える鳥たちがいなかったなら、こんな十二月の明るい日がなかったなら、ほかのみんなに陰で笑い者にされる年頃になってもなお天使の存在を信じつづけるような子はいなくなってしまうかもしれない。日の出前、みんなが犬の吠える声しか聞いていないときに、翼のはばたく音を聞いていた子なんて。

お姉ちゃんのせいなのだ。朝、まだ真っ暗な時間に私をベッドから引つ張り出し、無理やり窓辺に連れて行っただけは、お姉ちゃんなのだから。

「ほら、あそこよ！ あそこに飛んでいるでしょ！ はばたきの音、聞こえた？ 裾が見えるでしょ？ 起きなさい！ 寝すぎよ！」

その後しばらくして、クリスマスがすでに目前に迫り、広場で売れる前のツリーが針の葉を落としている頃には、「ほら、もう空が銀色になってる、ほら、じきにあの子が後を追ってくるわよ！」

「雨でしょ！」

と私が言うと、お姉ちゃんは小ばかにしたように笑った。

「あんたが寝すぎなのよ！」

寝すぎなのよ、天使たちが家の周りを飛び交う瞬間だけ、いつも寝すぎるんだから！

私はずいぶん前から、眠ることを死ぬことのように恐れるようになっていた。死ぬとは、天使たちを見逃すということでしょ？ 私はベッドに入って眠らないように必死で目を開け、翼のはばたきを、空が銀色になるのを待った。

そつと窓辺に近づいては表に目をこらして。でも聞こえてきたのは下で騒ぐ酔っ払いたちの大声だけで、「ハレルヤー」と叫び声を上げる酔っ払いまでいた。お姉ちゃんとはつくに眠りについていて。時計が一時を打ち、二時を打ち——私は枕を噛んだままうとうとした。そして再び目を覚ました。そのとき空に銀色の痕跡が見えたような気が、どうもそんな気がしたの。私はベッドから飛びおりて木箱から薪を取つてくると、それをベッドに放り投げてその上に横になった。でも三時の音を聞く前に薪の上で眠つてしまった。朝になると、やっぱりお姉ちゃんのほうが先に起きていた。お姉ちゃんは今度は翼の先端を見ていた。あんたを起こすのに時間を取られなかったら、もつとたくさん見られたのに。

「あんたたちは天使を見た？」

この頃には、私は学校の子たちから馬鹿にされるようになっていた。いい年して、天使がいるなんて信じちゃだめよ、太つちよの小さな天使なんか肩から振り落としてしまいなさい。でも私は笑つてやりすごした。

「あんたたちが寝すぎなのよ！」

このときから私の天使たちは私の上を行く存在になった。「天使なんていない！」などと言う子たちはみんな寝すぎなのだ、世界じゅうが眠っている人たちの陣営になつてしまったのだ、そしてその上を天使たちがぐるぐる飛び回っている。

あの日、お母さんが迎えに来ていた。お母さんは私たちの所では暮らしていなかったけど、ときおり学校に私を迎えに来て、途中まで送ってくれていた。お母さんは私と話すとき、大人と話すような口ぶりになることがあった。あの日、お母さんは私に言ったのだ、近頃は夜ベッドに入つても目が冁えて眠れないの、と。私はお母さんが大好きだつ

たし、お姉ちゃん以上に信頼する人間がこの世にいとすれば、それはお母さんだった。ベッドに入っても目が冴えているのなら、お母さんはきっと天使たちのことを知っているはず。

正確に思い出せるわ、いま目の前に見えるし、聞こえる。二人でちょうどツリーを売っている広場を渡っていると、きだ、広場の上の空は十二月にしては高すぎるほどで、ツリーのそばで男の人がうとうとしている。あれは暖かくて悲しい日、彷徨える鳥。さつきから長々と別の話をはじめていたお母さんに、私は天使のことを尋ねてみる。お母さんは言うの――

「そんなの見たことないわ！」

お母さんは足を止めて私をじつと見つめて笑って言う。

「まさかあんたがまだそんなことを信じているなんて知らなかった。私はそんなの見たことがないわよ」

そのあと、私たちはそそくさと別れた。

でもそのときにはもう、それをすんなり受け入れるには私は大きくなりすぎていた、信じ込んでいた時間が長すぎたのだ。お母さんたちに騙されていたにしても、その期間が長すぎた。私は証が欲しかった、ふいに広場を渡って行く天使の軍勢のざわめきを聞いたかった、ゲラゲラあざ笑う鳥たちがみんな地面に落ちるのを見たかった。でも天使たちは来なかった。鳩の群れが飛び立って、静まり返る空の下をぐるぐる回ってくれた。けれど、もう空は天ではなくなっていた、空はただの空気になっていた。みんな私を笑っていたのね、私をコケにしていたんだわ、あまりにも長く私が白々とした煙を白い衣だと思っていたから、朝の鐘の余韻を翼のはばたきの音だと思っていたから。注意してくれたらよかったのよ、そうすれば私だって、ほかのみんなと同じようにさつきとやめていたかもしれないのに。で

も、今となっては遅すぎる。もう天使は小さなエンゼルではなくなってしまった、顔のふっくらした明るい色の短い巻き毛の小さなプットではなくなってしまった。天使たちは大きくなってしまった、生真面目なかんしゃく持ちになってしまった。彼らも私と同じようにこの一年であまりに早く大きくなったから、そんな彼らを捨て去るのはいつしか簡単ではなくなっていたの。だって私たちと一緒に生まれた天使たちは、最初の頃こそ小ささは私たちと同じくらいで、私たちと一緒に育ち、腕白に強くなって、それに翼も彼らとともに大きくなったのよ。だから私たちは大人に近づくにつれ、戦うのが難しくなってしまう。

暗くなり始めてから、ようやく私は家に帰った。それまで中庭へ抜ける通路をぶらぶらしたり川べりのベンチに座ったりして、何時間もの世で独りぼっちだった、意味のない門と意味のない窓の間で独りぼっちだった。夜に翼で窓をなぞっていく天使がいけないのなら、門や窓があっても意味がないもの。そんな窓ならいまいがまし、門も家も煙突から出る煙もないほうがまし、火の灯らない街灯ならいまいがまし、天使のいない世界なら、ないほうがましだわ！

帰ると、お姉ちゃんはどう待っていた、お姉ちゃんはいつだって待っている。お姉ちゃんは目には見えない何かを、すでにここにいるから決して来ることのない誰かを待ちわびているように、そのとき私には見えた。お姉ちゃんは天使を待ちわびているのだとばかりこれまで思っていたけど。お姉ちゃんはアパートの階段の手すりに寄りかかり、お下げ髪が手すりの上に垂れていた。うしろの玄関ドアは開いたままで、霧が玄関ホールの窓の隙間から入り込んでいた。隙間にひっかかった天使の衣だ。けれど、このときばかりは私は天使を捕まえ、このときばかりは天使の髪から星をひたつた。そしてお姉ちゃんがまた、

「彼らを見たわ」

と言ったとき、私はもうお姉ちゃんの言葉を信じるのができなかった。じゃあ、それを誓ってみせてよ！

そのときはまだ知らなかったのだ、私たちの存在を誓ってみせるのは天使のほうだということを。私たちが天使を夢に見ているのではなく、天使が私たちを夢に見ているのだ。私たちが天使の明るい夜の中でうごめく霊なのだ。ありもしないドアを開け閉めして音を立てるのは、鎖のような音を立てる飾り紐を飛び越えるのは、私たちのほうなのだ。天使の夢の中なのだから、私たちはもっとおとなしくしているべきなのかもしれない、そうすれば天使をびっくりさせずにすむもの。影がこの荒れ地に落ちるとき、その影は天が投げているのだ。それでお姉ちゃんは誓うことができなかったのだ。

「天使なんかいないじゃない。この嘘つき、天使なんかいないじゃない！」

お姉ちゃんに面と向かってそう叫んだとき、私の予想に反してお姉ちゃんは弁解しなかった。怒りもせず、ふき出して笑いもせず、反論すらしなかった。思ってもみないことだったのか、お姉ちゃんは私と同じくらいうろたえていた。そのときお姉ちゃんは十五歳で、学校を卒業してすでに一年が経つというのに、さもこれまで考えもしなかったことを私に言われたかのような顔を、自分が天使を信じていたのは私が信じていたからだと言わんばかりの顔をしていた。

「翼を信じていればいい、空の銀色を信じていればいいわ、本当に見たのなら！」

それでもお姉ちゃんはじっと静かにしていた。私はどんなことも覚悟していたけれど、まさかお姉ちゃんがこんな風に黙って引き下がるとは、こんな風に突然無防備になるとは、半ば嘘を認めるとは思ってもみなかった。私は敵を見越して、すべての武器を携えて窮地に追い込んだつもりが、からっぽの中に突っ込んでしまったのだ。お姉ちゃん

はいつの間にか自分の軍隊を退いてしまっていた、もしかしたら軍隊がかつてに逃げ出したのかもしれないけれど、そのあたりは今でも分からない。お姉ちゃんは私のために料理を温めてテーブルの用意をしてくれたけど、誓うことはできなかった。私がお姉ちゃんのお下げを引っ張ったりスカートを引っ張ったりして叩き合いになったけど、それでもお姉ちゃんは誓ってはくれなかった。

私たちはテーブルについていた、私たちは真つ暗な中で向かい合い、私たちは夕べの鐘の音が聞こえても動かなかった。私たちは部屋の中に座っていて、部屋は家の中にあつて、家は球の上に建っていた、酔っ払いのように意味もなくぐるぐる回る球の上に。私たちは二人ともじつと静かに座っていて、でもお姉ちゃんは私よりもっと静かにしていた。街灯の弱い光が窓から流れ込んでお姉ちゃんの肩を照らし、お姉ちゃんのお下げ髪をエンゼルヘアに変えた。あれと同じだ、階下の屋台で安い値段で手に入るあのエンゼルヘアと。家にいるのは私たち二人きりで、もしかしたら私たちは相変わらず証を待っていたのかもしれない、空に響くざわめきを待っていたのかもしれない。いずれ来るのなら、このときに来てくれなくちゃいけなかったのよ、屋台の屋根を取っ払うために、かわいらしい包装をやぶって偽のエンゼルヘアを引っ張り出し、長く束になった、うっかり頬に当たると細い鞭のように肌を切り裂いてしまう本物のエンゼルヘアをなびかせるために。いつか来るのなら、このときに来てくれなくちゃいけなかったのよ、街灯の火を吹き消して、市場という市場の売れる前のツリーに火を放つために。でも来てはくれなかった、窓ガラスを割りもせず、私たちの脇腹をつつくこともしなかった。私たちをこの囚われの状態から連れ出してはくれなかった。おもちやや甘いクッキーへの期待の中に私たちを二人残して。クッキーの翼なんて食いちぎられてしまうのに。

こうしている間も、どこかで安いプレゼントを見つけようとお父さんが街じゅうを歩き回っているかと思うと、幼

子に先だって飛んでくる天使なんかいないのに、今頃どこもかしこも教会で歌が歌われているかと思うと、可笑しくて仕方ない。それじゃ、幼子は？ 幼子は白い小さなそりに乗って広大な宇宙空間を彷徨いながら、なんでこんな遠い距離を行くのか疑問に思っているわ。幼子は一つの雲で、それ以上ではないのだから。お姉ちゃんは誓うことができないのだから。

お姉ちゃんの軍勢は目に見えぬまでも打ちのめされていて、私の軍勢は目に見えて打ちのめされていた。つまり、私の軍勢は敵地の氷のように冷たい空虚さと冷めきった士気にぞっとして意味もなく逃げ出してしまったけれど、お姉ちゃんの軍勢は傷ついて森の奥深くに横たわっていたのだ、初めから傷ついていて、自衛しようなどと微塵も考えない者たちは、死を待つばかりの血友病の者たちは、打ちのめされたその天使の軍勢は。けれど、逃げていく足音と忘れられた森の間で、何も知らない羊飼いたちは子羊たちに放牧をはじめている。

すっかり真っ暗になってから、私はベッドに入った。窓の外では雨まじりの雪が降りだしていた。横になってうとうとしながら、疲れきった天使たちの翼がこの雪で重く、どんどん重くなっていくのを見ていた。一方で幼子は独りきり、月面の山岳地帯をぬけ、口の開いたクレーターに沿ってひた走っている。警告してあげたかったけれど、力が出なかった。

しばらくしてお父さんが帰ってきた音がし、お姉ちゃんと二言三言交わすのが聞こえた。二人がたくさん話すのなんて聞いたことがないけど。さらにしばらくして、鍵が鍵穴の中で回る音がしたから、きっとお父さんはまた出かけたのだと思う。お姉ちゃんは子供部屋のドアを開けたものの、どうしたものか決めかねて少しの間ドア口に立っていた。それから私のベッドの方へ一步、二歩と近づいてきて、でも私はじっと静かに横になっていた。お姉ちゃんは背

を丸めて私の顔を覗き込んだ。でも私は目を閉じたままだった。お姉ちゃんは音を立てないように部屋から出ていった。今度寝入ったときには、もう夢を見なかった。私の眠りは復活など期待しない人々の死のように、からっぽになっていた。

ところが、自分の意志に反して寝入ってしまったのと同じように、予想に反して私は目を覚ました、時のない、どこか知らない所で。掛け布団が大理石の墓石みたいに重たい。体を動かすことも、目を開けることもできない。石はいや。雪の方がいい、雪なら溶けるもの！ みんな何をしたの？ 私を埋めてしまったのね、死んでもいいのに！ もうみんな家に帰って、今頃ろうそくに灯をともしているわね、焼き立てのクッキーと小枝の燃えるにおいを漂わせて。外は吹雪になっちゃった、吹雪になる前に家に帰れてよかったね。それじゃ、私は？ 私は死んでないのよ！

天使さんたち、私を助けて、早く、ここの空気がまだ残っているうちに！ 来て、どうして来てくれないの！ 死んじゃったの？ そうなのね。いま分かった——死んだのはあなたたちなのね。昨日の夜、私たちが葬ってしまったから。あなたたちは死んでいなかったの？ 生きたまま石の下に横たわっているのはあなたたちなの？ 私が手を貸すわ、待ってて、体を動かしてこの石を持ち上げてあげる！ ありったけの力を振り絞ってこの石を持ち上げてみせるわ、このてのひらで——神様、力を貸して！ この石はなんて軽いの！ 私、飛んでる。あなたたちも飛べる？ この石は雪だったのね。

月の光が部屋じゅうに溢れて、あまりの明るさに、閉まったドアを開け放った窓だと思ってしまうそう。壁がぐるぐる回って、箱とベッドの位置が密かに入れ替わっている。めまいがする——何が私を目覚めさせたの？ 誰があの重たい石を雪に変えてくれたの？ 耳鳴りがする、でもこれじゃない、自分の声で眠りから覚める人なんていないも

の。心臓がうるさく鳴っている、ううん違うわ、あそこの窓を叩いているのは私の心臓じゃない、それに窓ガラスを揺らしているのは、窓ガラスを割って外から塞いでいるのは、風じゃない！ そんなことをするのは、あなたたちなの？

どうして私は疑ったりしたのだろう。私の天使さん、あなたは風なんですよ、なんて、一瞬でも考える私ではなかったのに。あなたの衣って白いのね、髪に雪が積もっているわ。外の雪がひどくて、あなたの後ろに天使たちがどのくらいいるのか見えない。きっと大勢いるのよね、群れをなして！ もっと近くに行ってもいい？ お祈りをすればいいの？ あなた、やけにじっとしているのね！ ガラスが曇っているの、開けてもいい？ あなたをもっとよく見たい、見たいの、あなたの飛ぶところを！ さあ動いて！ 翼はどのくらい大きいの？ 両足には何を付けているの？ あなたのために開けてあげたいの、私の天使さん、中に入って、大きな翼で何もかもひっくり返してちょうだい、ヨクゾキマセリ！

けれど、私が窓の方へ歩き出したときにはもう、天使が拒むように頭を動かしているのが見えた。それで思い出した、お姉ちゃんがいつも言っていたのだ、天使の顔を覗き込んではいけなないと。それで分かった、天使は衣の裾に触れてほしくないのだ。するとまた私は恐ろしい疑念にとらわれた、あれは雪かもしれない、風に飛ばされてきた布かもしれない、夢かもしれないと。私は天使が翼を広げるのを見たかった。

突風が窓から吹き込んできた。両手に余るほどの雪が口や目に押し寄せてきて、私はその雪のボール越しに天使がよろめくのを見た。翼を広げようとしているかのように見えたのだ。雪片が隙間なく目に吹き積もって、ほとんど何も見えなかったのだけれど。外は猛吹雪になったのだろう、また重たい突風が次々に襲って叩きつけるように窓を開

め、私の目をかすませた。ごしごし目をこすつてもう一度窓を開け放ったときには、もう雪しか見えなかった。雪は小高く狭くなった中庭で狂うように踊ったり、地面に落ちるや巨大な渦となつて屋根の向こうにはじき返されたりして、まるで触れさせてくれない天使の軍勢のようだった。

止めて、天使たちを止めて——屋根よ、高く伸びて、家はみんな塔になつて、天使たちをこれ以上行かせないで。道を見つけれないように、煙突たちは天使たちの行く道へ煙をやつて。眠っている人たち、あなたたちはろうそくに火を灯しなさい、そうすれば天使たちが見えるわ。天使たちに追いつくのは誰よ、最後の審判の日を作るのは誰よ？ 天使たちを私に返してくれるのは誰よ？ こういうときだ、お姉ちゃんが私を起こすのは。だけど今日は私がお姉ちゃんを起こすわ——

「起きなさい！」

塔時計が六時を告げ、そこに鐘が一つまた一つとためらいがちに加わつていく。部屋が真つ暗でベッドが見つからない。雪があんまりまばゆすぎたのだ、天使たちを目で追うのが長すぎたのだ。すぐにお姉ちゃんを起こさなきゃいけないのに——

「起きなさい、寝すぎよ！」。

掛け布団が床に落ちる。なのにお姉ちゃんはそれを両手でかたく握りしめていない、なのにお姉ちゃんは毎朝私がするみたいにうーんとうめかないし、冷たい床や天使に抗わない。お姉ちゃんは私をはねつけない、起こしたときに眠っていなかった人がするみたいにずっと静かなまま、いない人がただずっとそこにいるみたいに、おとなしく。

私たちが中庭でお姉ちゃんを見つけ、すっぱりかぶった雪の中から抱き上げたとき、お姉ちゃんはずっと静かなままだった。

訳者あとがき

ここに訳出した『夜の天使』(Engel in der Nacht)は、先ず一九四九年十二月二十五日、クリスマス当日付けの『ヴィーナーターゲスツァイトウング』(Wiener Tageszeitung)紙に掲載された。この頃イルゼアイヒンガーは集中的に短編小説に取り組み、『鏡物語』(Spiegelgeschichte, 1949)、『縛られた男』(Der Gefesselte, 1951)、『私の住んでいる所』(Wo ich wohne, 1952/53)などの優れた作品を次々に生み出した。『夜の天使』もそのような時期に書かれた優れた短編小説の一つである。

この時期の短編小説の大半は後に『縛られた男』という表題の短編集に収録されることになるが、これには三人称小説と一人称小説が混在している。一般的に三人称小説では語り手と主人公の間に一定の距離があるため、ものがたりの性格が強く前面に出てくるが、それに対し一人称小説は、主人公の「私」自身が語り手になる部分と、主人公として活躍する部分とがある。つまり、一人称小説とは「私」の目を通して語られる物語であり、「私」の記憶の物語なのである。それはアイヒンガーの作品も例外ではない。

この短編集では『夜の天使』と『私の住んでいる所』だけが一人称形態で書かれており、「私」は語り手になったり主人公になったりしながら、日々の出来事の中で複雑に揺れ動く主人公の心の襞の一つ一つを生々しくかつ精緻

に語っていく。アイヒンガー独特の簡潔で平易な文体も手伝って、読者は「私」に心に秘めていた話を告白されていると感じるのではないだろうか。(注2)

では、「私」が告白しようとする秘密とは何であろうか。この小説には二人の姉妹が登場するが、出来事はすべて「私」の視点から描かれる。「私」は姉とともに天使の存在を信じている。ある日、母親に天使を見たことなどないと言われ、天使の存在に対する確信が大きく揺らいでしまう。いったん疑念が生じると、「私」にはこれまでずっと天使を待っているとばかり思っていた姉が、「目には見えない何かを、すでにここにいるから決して来ることのない誰かを待ちわびているように」見える。姉が「彼らを見たわ」と言っても、もう姉の言葉を信じることができない。

「じゃあ、それを誓ってみせてよ!」と思つて問い詰めても、姉は誓ってはくれない。こうして「私」と姉との間で、あるいは「私」自身の中で、天使をめぐる戦いが勃発する。

すっかり真つ暗になって「私」はベッドに入る。姉が部屋に入ってきて私の顔を覗き込むが、やがて音も立てずに部屋を出ていく。そのまま「私」は寝入ってしまい、時のない、見知らぬ場所ですぐ目覚め、窓を介して天使と相まみえる。そして死と再生を思わせる幻想的な風景を目にする。その過程で「私」の心に大きな変化が生じ、また天使の存在を信じるようになって、「私」はいつも自分がされていたように姉を起こそうと、ベッドへと向かう。そして最後の二行、場面は現実には切り替わり、姉が中庭で雪に覆われた状態で発見されて終わる。状況から見ると、姉は自殺が事故で亡くなったと考えられるだろう。しかし妹の「私」は違った理解をしている。姉は実体あるものとしてベッドに横たわっているわけではないけれども、そこに横たわる姉の気配を確かに感じるのだ――「いない人がただずっとそこにいるみたいに、おとなしく」。そのとき「私」は気づくのである、「私たちが天使を夢に見ているのではなく、

天使が私たちを夢に見ているのだ。私たちが天使の明るい夜の中でうごめく霊」だということに。

この世界にはこちら側と、窓の向こうに、あるいは夢の中に天使の住むあちら側とが重なって存在していて、今二人はそのさざまにいます。ふつうに見ると姉は死んだと見なされるのだろうが、姉はこちら側では目に見えないだけであちら側にいるのだと、「私」にはわかつている——そんな大きな声では言えない秘密を、「私」はこっそり告白するのである。

アイヒンガーはメルヒェン好きということもあり、三人称小説の形態で「ものがたり」を書くことに非常に長けているのは周知のことであるが、一方で、このような一人称小説の形態を用いることにより、アイヒンガーはメルヒェンの要素を維持しつつも、主人公の少女の持つ理屈では上手く説明できない思春期の危うさのようなものを見事に描いてみせた——現実はどうであれ、「私」の記憶の物語が「私」の真実だと言わんばかりに。

注

- (1) Aichinger, Ilse: Engel in der Nacht In: Der Gefesselte In: Taschenbuch in acht Bänden (Fischer) 1991, S.53S.62
- (2) アイヒンガーの一人称小説については拙論(島浦一博「イルゼ アイヒンガーの『私の住んでいるところ』について」)を参照のこと。